

第6学年 社会科学習指導案

単元名「戦争を体験した人々とくらし」

～清水口少年と戦争～（全8時間）

1 単元について

本単元の学習は、1931年から始まった15年間にわたる戦争の満州事変や太平洋戦争について調べ、日本の大陸侵略のねらいや、日本国民とアジアの人々が被った戦争の悲惨さをとらえていくことである。そしてそのことを通して、これからの自分たちは平和な未来を築いていこうとする態度をもつことである。

日本の政治や経済の行き詰まりが軍部の台頭を促し、中国大陸への侵略へと向かっていったことが1931年から始まった15年間にわたる戦争のきっかけであった。そして、国民の全てが次第に戦争に巻き込まれ、物資面、精神面でも厳しく統制され、戦争中心のつらく苦しい生活を送ることを余儀なくされたのである。

本単元では、つらく苦しい生活という面を朝日町で幼少時代を過ごした方を取り上げ、その方の体験を学ぶことを通して、子どもでも大人でも世の中全てが戦争中心であった当時の社会をより鮮明にとらえることができると思う。また、その方の気持ちを探ることを通して、戦争の悲惨さだけでなく、今の平和で豊かな朝日町や日本はたくさんの人たちの犠牲の上に成り立っていること、そして二度とこのような戦争を繰り返さないという平和な未来を築いていこうという願いへとつなげていきたい。そして、平和の尊さや自分の生き方について考える子にしたい。

2 単元の目標

(1) 戦争の背景やその様子、戦時中の国民の生活などに関心を持ち、興味を持って意欲的に調べながら、我が国の歴史や伝統を大切にし、平和な未来を築いていこうとする心情をもつことができる。

(関心・意欲・態度)

(2) 戦争が国民生活へ及ぼした影響や、戦場になった地域の人々への被害の様子などについて問題意識を持ち、見通しをもって追究し、根拠を明らかにして適切に判断することができる。

(思考・判断)

(3) 現在と戦争当時の生活の違いなどについて

身近な調査活動を行ったり、戦争の資料を効果的に活用したりして具体的にまとめ、分かりやすく表現することができる。

(観察・資料活用の技能・表現)

(4) 戦争の歴史的背景や、我が国がアジア・太平洋地域において連合国軍と戦い敗れたことを知り、日本国民や戦場となったアジア・太平洋の諸国が大きな被害を受けたことを理解することができる。

(知識・理解)

3 研究と関わって

(1) 指導計画、単元構成の工夫

ねらいにせまる人物の教材開発

日本が15年も続いた戦争をしたことで、国民は戦争中心の生活を余儀なくされた。そのつらく苦しい生活は朝日町でも例外ではない。朝日町で幼少時代を過ごした方(清水口誠一さん)を取り上げ、その人の思いや考えを追究することを通して、純粹であるはずのその当時の子ども心までもゆがめてしまう戦争の悲惨さを知り、その当時としては、そのことが当たり前であったということを考えさせたい。

そして、身近なところで戦争を体験した人から、話を聞いたり、取材をしたりすることから自分たちは、絶対に戦争をしてはいけない、そして平和な世の中を築いていこうという強い思いを持たせたい。

社会的事象の意味をとらえる指導計画の作成・単元構成の工夫

1931年からの年表や、広島・長崎の原爆の映像資料を導入として、「どうして戦争が起こり、日本はどのようになっていったんだろう」という単元を貫く課題を設定して学習を進めていきたい。そして、戦争の始まり、広がり、戦争によって日本国民や他地域にも大きな被害を与えたこと(生活)、戦争の終わり、というように児童の意識をつなげていきたい。そして、実際に戦争を体験した人から話を聞くことを位置付けることで、より身近に戦争というものをとらえさせていきたい。

(2) 学習活動の工夫

ねらいを明確にした学習活動の工夫

前時に、戦時中の家庭と学校生活について考えるようにする。その中では、配給制でものが自由に手に入ることができないということ、戦争が激しくなると、お寺の鐘までもが供出され、鉄砲を作る材料になっていったこと、学校では、軍事教練や運動場までもが畑になっていったことを学習する。そこから生活全てが、戦争中心であったことを押さえておく。

本時は、そんな戦争中心の社会の中で、自分たちと同じくらいの年代をこの朝日町で生活していた方の思いを考えることをする。今の子ども達は戦争とは人と人が殺し合い、国を滅ぼしてしまうという最も恐ろしいものであり、何も得るものがなく、絶対にしてはいけないことは理解していると思う。けれどもその当時の少年は「自分は大きくなったら兵隊になりたかった」という事実を突きつけ、なぜそう思うのか、どうして戦争について自ら参加しようとするのか、ということの前時までの学習をもとにして当時の少年の思いを考えさせ、それは人間らしい心までもゆがめてしまう戦争の恐ろしさに気づかせていきたい。

仲間と練り合う交流活動の工夫

自分の考えを持たせる資料として、戦時中の標語、戦時中の教科書、旧朝日村福寿会が作成したかたりべ、そして前時までの資料を使う。

まず、戦時中の標語では、戦争中心の標語がたくさん作られ、それが町中に貼られたり、毎日見たり聞いたりしていたら、戦争に参加することは正しいことなんだ、ということが当たり前になってしまおうし、戦争に勝つことを誰もが信じていた社会であり、そしてみんなが心をつにしていたから、兵隊になって自分も参加したいという思いになることを考えさせたい。

戦時中の教科書からは、戦うことや兵隊になることは正しいことと、小さいときから教えられていた当時の教育について考えさせたい。

かたりべからは、朝日の人たちも天皇陛下に命を捧げるのは男子の誇りであったこと、先輩から直接航空隊の話聞き、航空隊のあこがれを持っていた少年と、徴兵令での丙種合格で肩身の狭かったという少年の文から、当時の少年が兵隊になることや戦争についてどのようにとらえていたのかということ考えさせたい。

そこで、子ども達に疑問に思うことを出させたい。課題でもある「死ぬかもしれない」ということを再度考えさせたい。子ども達から疑問

が出ない場合、教師側から「兵隊になるということは自分が死んだり、人を殺したりするんだよ。」ということに気づかせるようにする。そうすることで、子ども達は死ぬのはいやだ、人を殺すのなんて嫌だ。戦争なんていけない、ということを考えて思う。そこで、子ども達は「どうして清水口少年は死ぬかもしれないし、人を殺すかもしれない兵隊になぜそこまでしてなりたいと思っていたんだろう。」という疑問を導きさせたい。

その中で、死の恐怖までもなくしてしまうくらい、国のため、天皇のために死ぬということはとても名誉なことだと教えられ、考えられていたから、死ぬということのをさほど怖いと思わなかったことを考えさせたい。そして自分たちと同じような少年をそう思わせた世の中で、戦争は『人の命を尊重するという人間らしい心までもゆがめてしまうという恐ろしさ』に気づくことができるのではないかと思う。

(3) 指導・援助、評価の工夫

調べ考える指導・援助の工夫

自分の考えを見出せない子には、仲間同士で資料を見たり、教師と一緒に資料を詳しく見たりするようにする。

具体的には、「今は戦争の標語が町中に貼ってあるかな、どうして貼ってあるんだろう。貼ってあるとどうなのかな。今の教科書には兵隊のことが書いてないね。どうして書いてあるんだろう。」というように、考える視点を与えるようにする。また、仲間との関わり合う発言では「さんの意見を聞いてどう思いますか」ということをたずね、自分の考えを発表できるようにする。

学びを確かにする相互、自己評価の工夫

課題を提示した後に予想を書かせる。そして授業の最後に学習のまとめを書かせる。この二つを比較することで、自己の考えの高まりや変容を認識させる。これを自己評価としたい。

仲間の意見を自分の意見と比べて聞き、反応することで評価を伝え、相互評価としたい。また教科係が本時の振り返りを行うことで学級全体としての相互評価としたい。